

東邦大学学術リポジトリ

Toho University Academic Repository

タイトル	災害時の研究の重要性と困難さのはざままで
別タイトル	Between the importance and difficulty of research in disaster situations
作成者（著者）	端詰,勝敬
公開者	東邦大学医学会
発行日	2021.06.01
ISSN	00408670
掲載情報	東邦医学会雑誌. 68(2). p.99 99.
資料種別	学術雑誌論文
内容記述	論評
著者版フラグ	publisher
JaLCOI	info:doi/10.14994/tohoigaku.2020 038
メタデータのURL	https://mylibrary.toho u.ac.jp/webopac/TD77554552

災害時の研究の重要性と困難さのはざままで

現在は、世界中で新型コロナウイルス感染症の脅威にさらされており、ある意味、近年の最大の自然災害ととらえることもできる。

コロナウイルス感染症に関係する心理的ストレスは多岐にわたる。いつ感染するかもわからないというストレス、人との距離を確保し、マスクを着用しなければならないストレス、テレワーク・リモート授業などに伴う希薄な対人関係のストレス、偏見に対するストレスなどである。近年の研究では、コロナウイルス感染症後には心的外傷後ストレス障害、うつ病、不安症などの疾患が有意に増加することが知られている (Jonathan P Roger, et al. Lancet Psychiatry 7 (7): 611-627. 2020)。

一方、我が国では、未曾有の被害をもたらした東日本大震災からおよそ10年が経過している。津波の被害を受けた東北地方の沿岸部の復興はまだ途上であり、福島原発事故の影響で避難所での生活を続ける方も多く、放射性物質の問題も完全な解決には気が遠くなる時間を要することが想定されている。多くの方が、悲しみにさいなまれ、身内を亡くし、通院先をなくした。

医療者にとっては、災害被害の規模が大きくなればなるほど、災害支援が課題になってくる。実際に東邦大学医療センターでも即時に現地に向かい、支援体制を整えたと把握している。

私の立場は心身医学であり、大災害時の心理的な面をみると、東日本大震災の際には、病的な悲嘆や複雑性悲嘆が多く認められたという。東日本大震災が発生し、被害の大きさを知ってから、被災者のために何をしないといけないのか、何ができるかを自らに問いかけた。その時、所属する学会から福島（相馬市）へこころのケア支援のために向かう話が舞い込み、即座に派遣者へ立候補した。あとから自分に気づいたのではあるが、何をしてあげられるかという発想だったと思う。

準備を整え、仲間の車で相馬市へたどり着き、現地の方とミーティングをおこなって、「こころのケアチーム」としてゼッケンをつけ、避難所をめぐることになったが、その避難所で、「こころのケアチームお断り」「アンケートお断り」という紙が貼ってあった。関係者から聞いたところによると、既にこころのケアと称したグループがいくつも来て、避難所の方々が嫌がっているとのことであった。

災害があった際に、避難所でのメンタルケアが欠かせないことは論をまたない。しかし、貴重であることは理解できても、データをとる必要があるのかと自分の中で怒りも感じていた。

科学は未知のことを取りあげ、解明することが求められる。そういう意味では、だれも経験したことのないような災害時に人はどのような反応をするのか、知りたいのは当然であり、むしろ研究しないといけないはずである。しかし、対象の方の感情をどうするのか、どのような配慮をどこまですべきか、この点は重要であるが、ひじょうに難しい。多くの研究は倫理委員会の審議があり、審査を通ったものが研究を実施できる仕組みであるので、被災者のことも十分考慮されているべきである。しかし、実際にはその研究が重要であれば、いわゆる感情は軽視される傾向にあるのではないかと私は感じている。

ひとのこころや脳はミステリアスであり、研究への魅力に富んでいる。しかし、探求心が暴走してはいけない、また、時を逃しては研究としての意味が色あせてしまう。医学教育では、全人的医療人教育、プロフェッショナリズム、倫理など自分が学生だったころにはまったくなかった内容が充実するようにならなっており、このジレンマの中で、研究探求心と倫理観とのバランスを上手にとれる研究者が増えていくはずである。

(東邦大学医学部心身医学講座：端詰勝敬)

DOI : 10.14994/tohoigaku.2020-038